

## 第8章 特別支援学級・通級による指導

### I 結果と考察

#### 0. 分析対象について

本章では通常の小中学校に通う児童生徒及び教員に対する調査結果を報告する。回答者の属性について、表 8-1 に示した。結果は①校種（小学校・中学校）、②重複障害の有無、③指導形態（難聴学級・通級教室）の3つの属性に分けて分析した。以下では、①校種の違いについてはすべての項目で触れ、②重複障害の有無による違いと③指導形態の違いについては、何らかの特徴がみられた箇所のみで触れる。なお、指導形態にふれる際、通級指導教室全 94 件のうち 60 件は特別支援学校（聴覚障害）で指導を受けている事例であったが、まとめて分析を行った。さらに、言語障害学級の回答数が少ないことから分析の対象から除外した。また、重複障害がある群に関しては、指導形態は問わずに分析した。

表 8-1 回答者の属性

	小学校・重複なし	小学校・重複あり	中学校・重複なし	中学校・重複あり
難聴学級	60	12	17	3
通級教室	66	1	24	3
言語学級	2	0	0	0
計	128	13	41	6

表中の数字は回答件数を示す。

#### 1. 教員に関する質問項目から

##### 1) 単純回答

##### ①教員歴

小学校での教員歴の平均は 21.40 年 ( $SD=10.57$ , 最短 1 年～最長 41 年) であった。中学校での教員歴の平均は 23.89 年 ( $SD=9.18$ , 最短 2 年～最長 41 年) であった。小学校、中学校ともに教員歴 1～2 年目の初任者から、定年後の再任用の者まで幅広く含まれていた。

##### ②指導歴

小学校での聴覚障害児に対する指導歴の平均は 6.81 年 ( $SD=8.05$ ) であった。その内訳を表 8-2-1 に示した。全体的に 5 年や 10 年以内の者が多い点特徴的であったが、難聴学級と重複障害ありの群において特に経験が浅い教員が多い点特徴として挙げられた。そこで、経験年数が 5 年以下の者に限って詳細をみると (表 8-2-2)、0 年や 1 年目の者が多い特徴がみられた。

それぞれの指導の経験の具体的内容をみると、難聴学級と重複あり群を担当する教員は「通常学級での指導歴」が最も長いのに対し、通級指導を担当する教員は「特別支援学校（聴覚障害）」での指導歴が最も長い点特徴的であった。

表 8-2-1 小学校における指導歴

	0-5年	6-10年	11-15年	16-20年	21-25年	26-30年	31年以上
小学校・難聴	88.3	5.0	1.7	1.7	3.3	0.0	0.0
小学校・通級	25.8	28.8	15.2	19.7	1.5	1.5	7.6
小学校・重複	92.3	0.0	7.7	0.0	0.0	0.0	0.0

表 8-2-2 指導歴が 5 年以下の回答者の内訳

	0年	1年	2年	3年	4年	5年
小学校・難聴	32.1	32.1	17.0	3.8	7.5	7.5
小学校・通級	52.9	17.6	5.9	5.9	17.6	0.0
小学校・重複	16.7	25.0	16.7	8.3	16.7	16.7

上記の 2 つの表について、表中の数字は属性ごとの割合を示す。また灰色のセルは最も割合が高いことを示す。

中学校での聴覚障害児に対する指導歴の平均は 8.55 年 ( $SD=8.45$ ) であった。その内訳を表 8-

3-1に示した。全体的に5年以内や10年以内の者が多い点特徴的であったが、通級教室についてはある程度散らばりがある点は小学校と共通していた。経験年数が5年以下の者に限って詳細をみると（表8-3-2）、0年と4年程度の者が多い特徴がみられた。

それぞれの指導の経験の具体的内容をみると、難聴学級を担当する教員は「通常学級での指導歴」が、通級指導を担当する教員は「特別支援学校（聴覚障害）」での指導歴が最も長い点特徴的であった。重複あり群を担当する教員は「難聴学級」及び「通常学級」での指導歴が長い点特徴的であった。

表 8-3-1 中学校における指導歴

	0-5年	6-10年	11-15年	16-20年	21-25年	26-30年	31年以上
中学校・難聴	70.6	17.6	0.0	5.9	5.9	0.0	0.0
中学校・通級	33.3	25.0	4.2	16.7	20.8	0.0	0.0
中学校・重複	50.0	0.0	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0

表 8-3-2 指導歴が5年以下の回答者の内訳

	0年	1年	2年	3年	4年	5年
中学校・難聴	41.7	0.0	0.0	8.3	50.0	0.0
中学校・通級	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
中学校・重複	0.0	0.0	33.3	0.0	66.7	0.0

上記の2つの表について、表中の数字は属性ごとの割合を示す。また灰色のセルは最も割合が高いことを示す。

### ③担当児童生徒数

小学校での担当児童数の平均は9.42人（SD=13.20人）であり、そのうち人工内耳装用児童数は平均3.10人（SD=3.93人）であった。中学校での担当生徒数の平均は13.94人（SD=13.53人）であり、そのうち人工内耳装用生徒数は平均4.79人（SD=3.94人）であった。それらの内訳をみると（表8-4）、通級教室での担当児童生徒数が多いという特徴が共通していた。また、中学校の重複あり群の生徒数が多いという特徴がみられるが、これは通級教室の担当生徒数が多いことが影響していると考えられた。

表 8-4 担当児童生徒数と人工内耳装用児童生徒数

	小学校		中学校	
	平均児童数	人工内耳装用児童数	平均生徒数	人工内耳装用生徒数
難聴学級	1.53 (SD=1.02)	1.12 (SD=0.27)	3.76 (SD=4.19)	2.29 (SD=2.14)
通級教室	17.64 (SD=14.88)	5.38 (SD=4.85)	21.30 (SD=13.38)	6.59 (SD=4.00)
重複あり	1.38 (SD=1.12)	1.15 (SD=0.38)	17.17 (SD=13.33)	4.83 (SD=2.99)

表中の数字は平均児童生徒数を示す。

### ④医療機関との連携の有無

小学校では48.9%が医療機関と連携をとっているとの回答が得られた。その内容に関する自由記述をカテゴリに分類した結果、小学校（重複なし：有効回答81）では「情報共有（32件）」、「医療機関からの直接的な助言（13件）」、「診察・指導への同伴（10件）」が上位を占めた。小学校（重複あり：有効回答5）では「情報共有（2件）」、「医療機関からの直接的な助言（2件）」、「発達検査（1件）」であった。

中学校では65.5%が医療機関と連携をとっているとの回答が得られた。その内容に関する自由記述をカテゴリに分類した結果、中学校（重複なし：有効回答15）では「情報共有（6件）」、「医療機関からの直接的な助言（5件）」、「定期的な健診（4件）」であった。中学校（重複あり）の回答は1件のみで、「定期的な健診」であった。

小学校、中学校ともに、重複障害の有無に関係なく「情報共有」が基本的な連携であった。そ

の方法としては、「保護者を通じて検査結果を受け取る」という一方向のものもあれば、「学校での様子を文書にして渡す」といった双方向の連携を行う等の回答もみられた。また、直接的な指導を受ける機会を設定したり、指導に同行したりするなど、医療機関からの助言を能動的に求めている様子もうかがえた。

## 2) 記述式

### ①指導上の課題

補聴器装用児と比較した際に、人工内耳装用児に対する指導上の課題として感じている点について、自由記述による回答をカテゴリに分類した。各属性において件数の多かったカテゴリを表 8-5-1 と表 8-5-2 に示した。従来から指摘されることの多かった語彙を中心とした言語面の課題に加え、「自分が聞き逃していることに気づいていない」といった自身の聞こえに関する認識の弱さや、指導する側の人工内耳に関する知識の少なさが全体に共通する課題として挙げられた。小学校の難聴学級と重複障害あり群において、「比較対象がないのでわからない」や「特にない」という回答が比較的多かった点も特徴的であった。

表 8-5-1 小学校の担当教員が感じる指導上の課題

小学校・難聴学級		小学校・通級使用		小学校・重複障害	
比較対象がないのでわからない	12	語彙	13	知識不足	5
特にない	7	知識不足	9	比較対象がないのでわからない	4
活動上の制限	5	自己認識	7	自己認識	1
知識不足	3	傾聴態度	3	活動上の制限	2
イントネーション	2	その他	2	特にない	1
語彙	2				
騒音下	2				
補聴援助システム	2				

表中の数字は回答件数を示す。

表 8-5-2 中学校の担当教員が感じる指導上の課題

中学校・難聴学級		中学校・通級使用		中学校・重複障害	
自己認識	4	自己認識	4	知識不足	1
特にない	4	知識不足	1	自己認識	1
活動上の制限	2	語彙	1		
外国語	1				

表中の数字は回答件数を示す。

### ②指導上の工夫点

表 8-6-1 小学校の担当教員が感じる指導上の工夫点

小学校・難聴学級		小学校・通級使用		小学校・重複障害	
特にない	11	子どもの様子の確認	8	比較対象がないのでわからない	3
補聴援助システム	5	理解啓発	8	特にない	2
比較対象がないのでわからない	4	特にない	7	安全面	2
安全面	4	音楽の練習	3	補聴援助システム	2
話しかけ方	3	自己認識	3	自己認識	1

表中の数字は回答件数を示す。

表 8-6-2 中学校の担当教員が感じる指導上の工夫点

中学校・難聴学級		中学校・通級使用		中学校・重複障害	
特にない	9	連携	2	安全面	1
視覚情報	2	特にない	1	特にない	1
安全面	1	自己認識	1		
補聴援助システム	1	理解啓発	1		

表中の数字は回答件数を示す。

補聴器装用児童生徒と比べて、指導上、工夫している点について自由記述による回答をカテゴリに分類した。各属性において件数の多かったカテゴリを表 8-6-1 と表 8-6-2 に示した。補聴援助システムを活用する、話し方に留意する、子どもの様子を確認しながら話すといった、聴覚面に対するアプローチを基本とした指導上の工夫がみとれた。さらに、人工内耳が故障しないように安全面の配慮も行っていることがわかった。

### ③補聴器装用児との指導上の違い

補聴器装用児童生徒と比べて指導しやすい点について、自由記述をカテゴリに分類した。各属性において件数の多かったカテゴリを表 8-7-1 と表 8-7-2 に示した。全体的に聴覚的な理解の良さや発音の明瞭さを感じている様子が見え、それらがコミュニケーションのとりやすさにつながっていると考えられた。また、指導上の課題と同様に小学校の難聴学級と重複障害あり群において、「比較対象がないのでわからない」や「特にない」という回答が比較的多かった点も特徴的であった。

表 8-7-1 小学校の担当教員が感じる指導上の違い

小学校・難聴学級		小学校・通級使用		小学校・重複障害	
聴覚的理解の良さ	18	特にない	12	聴覚的理解の良さ	5
特にない	9	聴覚的理解の良さ	9	比較対象がないのでわからない	3
比較対象がないのでわからない	6	発音の明瞭さ	9	ブール	1
コミュニケーション	2	言語発達	7	コミュニケーション	1
その他	2	コミュニケーション	4	特にない	1

表中の数字は回答件数を示す。

表 8-7-2 中学校の担当教員が感じる指導上の違い

中学校・難聴学級		中学校・通級使用		中学校・重複障害	
特にない	4	特にない	5	聴覚的理解の良さ	1
聴覚的理解の良さ	3	発音の明瞭さ	2	特にない	1
コミュニケーション	3				

表中の数字は回答件数を示す。

### ④学習したい研修内容

人工内耳装用児の指導にあたって学習したい研修内容について自由記述をカテゴリに分類した。各属性において件数の多かったカテゴリを表 8-8-1 と表 8-8-2 に示した。全体を通して人工内耳の仕組みや、人工内耳を装用した際の聞こえの特徴などの基礎的な情報について理解を深めたいといった内容の回答が多かった。

表 8-8-1 小学校の担当教員が学習したい研修内容

小学校・難聴学級		小学校・通級使用		小学校・重複障害	
基礎知識	35	基礎知識	29	基礎知識	9
言語指導	6	言語指導	10	言語指導	2
管理方法	3	障害受容	4	聴能学習	1
将来的な課題	2	管理方法	1		
合理的配慮	2				
聴覚学習	2				

表中の数字は回答件数を示す。

表 8-8-2 中学校の担当教員が学習したい研修内容

中学校・難聴学級		中学校・通級使用		中学校・重複障害	
基礎知識	8	言語指導	5	基礎知識	2
特にない	7	基礎知識	3	特にない	1
連携	1				

表中の数字は回答件数を示す。

## 2. 児童生徒に関する内容

### 1) 単純回答と記述式

#### ① 学年

小学校については1年生を担当している者が21名、2年生を担当している者が26名、3年生を担当している者が22名、4年生を担当している者が27名、5年生を担当している者が24名、6年生を担当している者が21名であった。

中学校については、1年生を担当している者が14名、2年生を担当している者が17名、3年生を担当している者が16名であった。

#### ② 指導形態

小学校については、特別支援学級(50.7%)と通級による指導(47.9%)がそれぞれ約半数を占めた。中学校については、通級による指導が占める割合(57.4%)が、特別支援学級(38.3%)よりも高かった。

#### ③ 人工内耳装用状態

小学校については、全体の58.5%は両耳に人工内耳を装用しており、片耳に人工内耳を装用している児童の割合が41.5%(右耳24.6%、左耳16.9%)であった。片耳装用のうち73.1%がもう片耳に補聴器を装用していた。

中学校については、全体の25.5%は両耳に人工内耳を装用しており、片耳に人工内耳を装用している児童の割合が74.5%(右耳51.1%、左耳23.4%)であった。片耳装用のうち57.4%がもう片耳に補聴器を装用していた。

両耳装用の効果が強調され始めたのは2010年代に入ってからであるため、その時期に手術を行っている小学生の方が両耳の装用割合が高いと考えられる。

#### ④ 聴覚障害診断時の年齢及び聴力レベル

小学校では1歳での診断が最も多く(32.4%)、2歳(23.8%)、3歳(18.3%)が上位を占めた。装用前の聴力レベルの平均は右耳が99.06dB( $SD=21.78$ )、左耳が99.01dB( $SD=21.28$ )、人工内耳装用時の聴力レベルの平均は右耳が32.45dB( $SD=16.81$ )、左耳が36.21dB( $SD=13.57$ )であった。

中学校では1歳未満での診断が最も多く(60%)、残りは1歳(20%)、2歳(11.42%)、3歳(8.58%)とであった。装用前の聴力レベルの平均は右耳が103.0dB( $SD=14.14$ )、左耳が101.66dB( $SD=15.89$ )であり、人工内耳装用時の聴力レベルの平均は右耳が36.70dB( $SD=18.93$ )、左耳が38.32dB( $SD=20.15$ )であった。

#### ⑤ 人工内耳装用開始時期

小学校では平均2.86歳( $SD=1.71$ )で人工内耳を装用しており、その内訳をみても約半数以上が2歳までに装用を開始していた。中学校では平均4.48歳( $SD=3.36$ 歳)で人工内耳を装用しており、装用時期の個人差が小学校にくらべ大きかった。

## ⑥補聴援助システム

補聴援助システムについて小学校では全体の85.5%,中学校では全体の76.6%が使用していた。

## ⑦重複障害の種類(重複障害ありのみ)

小学校では13件(全体の9.2%)に重複障害があった。その内訳は「知的障害(4件)」、「発達障害(4件)」が多く、ついで「肢体不自由(2件)」であった。残り3件については、「知的障害+肢体不自由」、「視覚障害+PDD」、「肢体不自由+病弱」の合併例であった。中学校では6件(全体の12.8%)に重複障害があった。内訳は「知的障害」と「発達障害」が3件ずつであった。

## ⑧普段使用しているコミュニケーションモード

小学校の各コミュニケーションモードの使用割合を図8-1-1に、中学校のコミュニケーションモードの使用割合を図8-1-2に示した。全体をみると音声を使用する割合が高い点が共通していた。一方で、次点のコミュニケーションモードに着目した際、重複障害のある児童生徒において、指文字や手話などの視覚的コミュニケーションモードの使用率が高い点が特徴的であった。

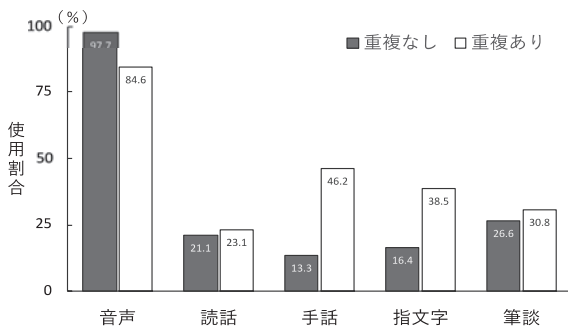


図8-1-1 小学校における各コミュニケーションモードの使用割合

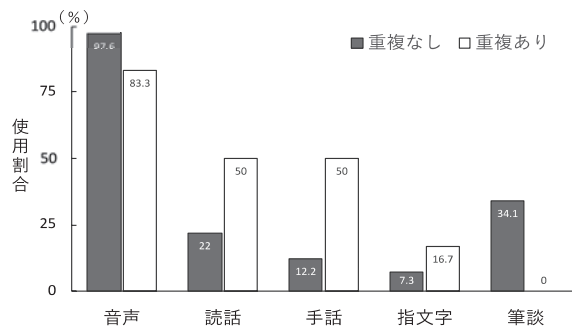


図8-1-2 中学校における各コミュニケーションモードの使用割合

## ⑨学校歴(現在まで)

小学校(重複なし)では、乳児期と幼児期にて「特別支援学校(聴覚障害)」に在籍していた割合がそれぞれ最も高かった(乳児期:46.1%,幼児期:61.7%)。小学校(重複あり)では、全体の53.8%が乳児期に「児童発達支援センター(難聴幼児通園施設)」に在籍しており、他の施設に比して高い割合を示した。幼児期では「児童発達支援センター(難聴幼児通園施設)」と「特別支援学校(聴覚障害)幼稚部」の在籍経験のある割合が同程度であった(いずれも38.5%)。

中学校(重複なし)では、乳児期と幼児期にて「特別支援学校(聴覚障害)」に在籍していた割合が最も高かった(乳児期:46.3%,幼児期:43.9%)。就学後は指導形態によって異なり、難聴学級群は「難聴学級(88.2%)」、通級教室群は「通常学級(81.5%)」に在籍した割合が高かった。中学校(重複あり)では、乳児期と幼児期にて「児童発達支援センター(難聴幼児通園施設)」に在籍していた割合がそれぞれ最も高かった(乳児期:33.3%,幼児期:50.0%)。就学後は「通常学級(50.0%)」、「特別支援学校(聴覚障害)小学部(33.3%)」、「難聴学級(16.7%)」の順に在籍した割合が高かった。

小学校と中学校に共通して、重複障害がない場合は、乳幼児期から幼児期の間特別支援学校(聴覚障害)に通う割合が高く、重複障害がある場合には児童発達支援センターに通う割合が高かった。後者に関しては、聴覚障害以外にも支援していることが影響していると考えられる。また

中学校の学校歴をみると、難聴学級と通級教室の指導形態については小学校段階からある程度一貫している傾向にある様子が見えられた。

### ⑩今後の進路

今後の進路の希望について、割合が高かったものを抽出し、小学校は表 8-9-1 に、中学校は表 8-9-2 に示した。中学への進学については上述のとおり、一貫した指導形態を希望する傾向があった。重複障害があると、進路の選択肢として特別支援学校（聴覚障害）も含まれる傾向がみられた。さらに、全体的に、高等学校卒業後は就職を希望する割合が相対的に高い点が共通した。

表 8-9-1 小学校において割合の高かった進路

	小学校・難聴	小学校・通級	小学校・重複
中学校	難聴学級 (65.0%)	通常学級 (78.8%)	難聴学級 (46%) 特別支援学校 (聴覚障害) (30.8%)
高校	一般の高等学校 (35.0%)	一般の高等学校 (43.9%)	特別支援学校 (聴覚障害) (30.8%) 一般の高等学校 (23.1%)
高校卒業後	就職 (40.0%) 大学 (21.7%)	就職 (30.3%) 大学 (22.7%)	就職 (38.5%) 大学 (15.4%)

表 8-9-2 中学校において割合の高かった進路

	中学校・難聴	中学校・通級	中学校・重複
高校	一般の高等学校 (88.2%)	一般の高等学校 (88.9%)	一般の高等学校 (66.7%) 特別支援学校 (聴覚障害) (50.0%)
高校卒業後	就職 (11.8%) 大学 (11.8%)	大学 (55.6%) 就職 (48.1%)	就職 (66.7%) 大学 (50.0%)

### ⑪聴覚活用の状態

「音への気づき」、「言語音の聞き取り」、「傾聴態度」について、属性別に集計した結果を表 8-10 に示した。音への気づき、言語音の聞き取り、傾聴態度ともに概ね良い傾向にある様子が見えられた。

表 8-10 各属性における聴覚活用の状態

小学校重複なし						小学校重複あり							
		++	+	±	-	--			++	+	±	-	--
音への気づき	難聴学級	10	68	17	5	0	音への気づき	0	62	23	15	0	
	通級教室	18	64	12	6	0	言語音の聞き取り	0	38	31	15	15	
言語音の聞き取り	難聴学級	7	58	18	13	3	傾聴態度	0	38	8	38	15	
	通級教室	11	62	17	11	0							
傾聴態度	難聴学級	13	65	10	10	2							
	通級教室	14	50	24	11	2							
中学校重複なし						中学校重複あり							
		++	+	±	-	--			++	+	±	-	--
音への気づき	難聴学級	6	71	18	6	0	音への気づき	0	67	8	8	0	
	通級教室	11	48	41	0	0	言語音の聞き取り	0	83	0	0	17	
言語音の聞き取り	難聴学級	0	82	18	0	0	傾聴態度	0	50	33	17	0	
	通級教室	7	48	37	7	0							
傾聴態度	難聴学級	12	82	6	0	0							
	通級教室	15	48	26	11	0							

1) 「++」は問題なし～「--」は問題ありを意味する。

2) これらの4つの表の数値は各項目の割合を示しており、色のついたセルは最も割合が高かった項目を意味する。

がえた一方で、重複障害がある場合は、言語音の聞き取りや傾聴姿勢に一定程度の弱さがある様子がうかがえた。

## ⑫言語活動

「文法力」、「文章理解力」、「作文力」、「文章構成力」を、同年齢の健聴の児童生徒の平均と比較し、属性別に回答を集計した結果を表 8-11 に示した。

表 8-11 各属性における言語活動の状態

小学校重複なし		++	+	±	-	--
文法力	難聴学級	7	17	22	25	30
	通級教室	6	17	35	33	9
文章理解力	難聴学級	10	17	20	23	30
	通級教室	8	21	29	32	11
作文力	難聴学級	3	15	25	25	32
	通級教室	6	14	38	35	8
文章構成力	難聴学級	7	15	15	35	28
	通級教室	6	17	32	33	12

小学校重複あり		++	+	±	-	--
文法力		0	8	23	23	46
文章理解力		0	8	31	15	46
作文力		0	8	8	31	54
文章構成力		0	8	0	38	54

中学校重複なし		++	+	±	-	--
文法力	難聴学級	0	12	53	35	0
	通級教室	11	7	41	41	0
文章理解力	難聴学級	0	12	47	35	6
	通級教室	11	15	33	37	4
作文力	難聴学級	0	6	47	41	6
	通級教室	7	11	41	41	0
文章構成力	難聴学級	6	0	59	24	12
	通級教室	7	11	37	41	4

中学校重複あり		++	+	±	-	--
文法力		0	0	50	17	33
文章理解力		0	17	33	17	33
作文力		0	0	33	33	33
文章構成力		0	0	50	0	50

- 1) 「++」は健聴児童生徒に比べて問題がない状態～「--」は健聴児童生徒に比べて問題がある状態を意味する。  
 2) これらの4つの表の数値は各項目の割合を示しており、色のついたセルは最も割合が高かった項目を意味する。

小学校において、回答の傾向は指導形態によっても異なり、難聴学級では同年代よりも「低い」の割合が高かったが、通級教室では「同程度」あるいは「やや低い」に回答が集中している傾向がみられた。中学校では、同年齢と比較して同程度の能力を有する者と、同年代よりも「やや低い者」の割合も相対的に高い点が特徴的であった。重複障害がある場合は「やや低い」のみでなく、「低い」という回答の割合も増加し、その傾向は小学校において顕著であった。

## 2) 学校での学習と生活

### ①学業成績

「健聴児と比べた学業成績の程度」、「潜在力と比べた学業成績の程度」、「読書力の程度」を、同年齢の健聴の児童生徒の平均と比較し、属性別に回答を集計した結果を表 8-12 に示した。

学業成績や読書力に関して、重複障害がない場合は同年代の健聴児童生徒と比較して同程度の能力、あるいはやや低い能力を有する者が多いことがわかった。小学校の難聴学級に関しては、特に読書力において「低い」という回答の割合が他よりも高くなる傾向がみられた。重複障害がある場合はこれらの能力は同年代よりも低くなる傾向が見て取れた。

同年代よりも低い値を示した児童生徒について、自由記述を分析した。小学校（重複なし：有効回答 39）の自由記述をカテゴリに分けると、「語彙の不足（11件）」、「読み書き・算数の学習困難（9件）」、「言語理解の弱さ（5件）」と「学ぶ場の調整（5件）」が上位を占めた。小学校（重複あり：有効回答 7）では、「下学年対応」、「文字の認識の弱さ」、「思考を伴う学習の苦手さ」が



2件、「集中力」が1件であった。中学校（重複なし：有効回答11）では「知識の定着の弱さ（3件）」と「聴覚面以外の問題（3件）」、「言語理解の弱さ（2件）」と「予習・復習の不足（2件）」、「指導する側の専門性の不足」が1件であった。中学校（重複あり）では「知的障害による困難さ」が2件であった。以上より、学力が低い者については言語力に関連する弱さや、知識が定着しないことが挙げられた。さらに、重複性がある場合は聴覚障害以外の影響もうかがえた。

表 8-12 各属性における学業成績の状態

小学校重複なし		++	+	±	-	--
学業成績	難聴学級	8	28	28	17	18
	通級教室	17	17	33	28	5
潜在能力との比較	難聴学級	55	25	12	8	0
	通級教室	59	25	13	3	0
読書力	難聴学級	17	7	30	18	28
	通級教室	8	22	28	31	11

小学校重複あり		++	+	±	-	--
学業成績		8	15	8	23	46
潜在能力との比較		46	8	15	15	15
読書力		8	0	31	8	54

中学校重複なし		++	+	±	-	--
学業成績	難聴学級	12	6	41	41	0
	通級教室	17	9	39	17	17
潜在能力との比較	難聴学級	65	24	6	6	0
	通級教室	30	43	9	17	0
読書力	難聴学級	6	6	59	29	0
	通級教室	17	13	35	26	9

中学校重複あり		++	+	±	-	--
学業成績		0	17	15	0	23
潜在能力との比較		67	0	0	17	17
読書力		0	33	33	0	33

- 1) 「++」は健聴児童生徒に比べて問題がない状態～「--」は健聴児童生徒に比べて問題がある状態を意味する。
- 2) 「潜在能力との比較」に関しては「++」は潜在能力と同じくらい～「--」は潜在能力と比較できないほど低い状態を意味する。
- 3) これらの4つの表の数値は各項目の割合を示しており、色のついたセルは最も割合が高かった項目を意味する。

## ②学習態度

「注意散漫の程度」、「注意持続時間の程度」、「口頭指示の理解の程度」を、同年齢の健聴の児童生徒の平均と比較し、属性別に回答を集計した結果を表 8-13 に示した。

表 8-13 各属性における学習態度の状態

小学校重複なし		++	+	±	-	--
注意散漫	難聴学級	23	13	35	20	8
	通級教室	26	14	29	25	6
注意の維持	難聴学級	13	12	45	23	7
	通級教室	15	14	35	32	3
口頭指示の理解	難聴学級	5	8	53	23	10
	通級教室	6	25	49	18	2

小学校重複あり		++	+	±	-	--
注意散漫		8	23	8	23	38
注意の維持		0	15	15	38	31
口頭指示の理解		0	0	38	46	15

中学校重複なし		++	+	±	-	--
注意散漫	難聴学級	12	29	47	12	0
	通級教室	35	26	17	13	9
注意の維持	難聴学級	12	0	65	24	0
	通級教室	13	30	30	22	4
口頭指示の理解	難聴学級	6	35	53	6	0
	通級教室	0	13	74	13	0

中学校重複あり		++	+	±	-	--
注意散漫		17	0	8	8	23
注意の維持		17	0	33	33	17
口頭指示の理解		0	17	33	33	17

- 1) 「++」は健聴児童生徒に比べて問題がない状態～「--」は健聴児童生徒に比べて問題がある状態を意味する。
- 2) これらの4つの表の数値は各項目の割合を示しており、色のついたセルは最も割合が高かった項目を意味する。

小学校、中学校ともに、重複障害がない場合は、学習態度に目立った困難さはみられなかった。重複障害がある場合は、全体的に注意集中の維持を苦手としている様子が見られた。

同年代よりも低い値を示した児童生徒について、自由記述を分析した。小学校（重複なし：有効回答 35）の自由記述をカテゴリに分けると、「学習に向かう姿勢の弱さ（16件）」、「聴覚的理解の弱さ（6件）」、「モチベーションの問題（5件）」で上位を占めた。小学校（重複あり：有効回答 8）では、「注意集中の維持の弱さ（3件）」、「モチベーションの問題（2件）」と「傾聴姿勢の弱さ（2件）」、「全般的な弱さ」が1件であった。中学校（重複なし：有効回答 6）では、「学習に向かう姿勢の弱さ（2件）」と「諦めの早さ（2件）」、「モチベーションの弱さ」と「課題の難易度の設定」が1件であった。中学校（重複あり）では、「注意集中の維持の弱さ（2件）」、「諦めの早さ」が1件であった。注意集中の維持などが弱い事例も数名みられたが、その背景には聴覚的理解の弱さや言語面の弱さがある可能性が見られた。一方で、重複障害に関しては、学業成績と同様に、聴覚面以外の弱さが影響している可能性が考えられた。

### ③コミュニケーション能力

「コミュニケーション能力」、「語彙力」、「話す能力」を、同年齢の健聴の児童生徒の平均と比較し、属性別に回答を集計した結果を表 8-14 に示した。

表 8-14 各属性におけるコミュニケーション能力の状態

小学校重複なし			++	+	±	-	--
コミュニケーション能力	難聴学級		2	12	42	40	5
	通級教室		6	18	48	20	8
語彙力	難聴学級		7	12	27	23	32
	通級教室		8	20	27	36	9
話す能力	難聴学級		5	17	35	32	12
	通級教室		9	20	33	35	3

小学校重複あり			++	+	±	-	--
コミュニケーション能力			0	0	23	62	15
語彙力			0	8	31	31	31
話す能力			0	8	8	23	62

中学校重複なし			++	+	±	-	--
コミュニケーション能力	難聴学級		0	12	59	29	0
	通級教室		8	21	42	25	4
語彙力	難聴学級		0	6	59	29	6
	通級教室		13	13	33	29	13
話す能力	難聴学級		0	6	65	29	0
	通級教室		8	17	42	25	8

中学校重複あり			++	+	±	-	--
コミュニケーション能力			0	0	23	15	8
語彙力			0	33	17	17	33
話す能力			0	0	67	17	17

- 1) 「++」は健聴児童生徒に比べて問題がない状態～「--」は健聴児童生徒に比べて問題がある状態を意味する。
- 2) これらの4つの表の数値は各項目の割合を示しており、色のついたセルは最も割合が高かった項目を意味する。

小学校、中学校ともに、同年齢の健聴児と比べて同程度の能力を有する、あるいはやや劣るといふ回答の割合が高かった点が共通していた。その中で、小学校の難聴学級における「語彙力」に関しては「劣る」といふ解答の割合が高いという特徴があった。重複障害があると「やや劣る」の割合が若干増加する傾向が見られた。

同年代よりも低い値を示した児童生徒について、自由記述を分析した。小学校（重複なし：有効回答 68）の自由記述をカテゴリに分けると、「語彙の不足（15件）」、「表現力の弱さ（12件）」、「友人とのコミュニケーションの難しさ（10件）」、「コミュニケーション時の積極性のなさ（9

件)」が上位を占めた。小学校（重複あり：有効回答 10）では、「相手に合わせることの弱さ（4件）」、「自分の意志を表現する言語力がない（3件）」、「コミュニケーション機会の不足」、「モチベーションの問題」、「語彙の不足」が各1件であった。中学校（重複なし：有効回答 21）では「語彙の不足（6件）」がもっとも多く、ついで「表現力の弱さ（5件）」と「コミュニケーション時の積極性のなさ（5件）」が上位を占めた。中学校（重複あり）では「語彙の不足（2件）」、「相手に合わせることの弱さ」が1件であった。コミュニケーションの苦手さとして、重複障害がない場合は、語彙力や表現力の不足からくるコミュニケーションの問題が中心的であり、友人とのコミュニケーションにも問題を抱えている様子うかがえた。重複障害がある場合には、上記に加え、相手に合わせることの弱さなど、聴覚障害以外の要因の影響うかがえた。

#### ④学校生活

「教師の質問やクラスメートとの話し合いへの参加状況」、「宿題などの提出状況」、「教師の指示後の課題遂行の困難さ」について、属性別に回答を集計した結果を表 8-15 に示した。

表 8-15 各属性における学校生活の状態

小学校重複なし		++	+	±	-	--
話し合いへの参加	難聴学級	10	10	35	33	12
	通級教室	5	6	34	42	13
提出物の状況	難聴学級	32	37	30	2	0
	通級教室	27	35	31	5	2
指示理解	難聴学級	7	42	38	13	0
	通級教室	6	23	50	15	6

小学校重複あり		++	+	±	-	--
話し合いへの参加		0	0	17	50	33
提出物の状況		31	23	38	8	0
指示理解		0	17	25	33	25

中学校重複なし		++	+	±	-	--
話し合いへの参加	難聴学級	0	6	71	24	0
	通級教室	4	4	35	48	9
提出物の状況	難聴学級	29	29	35	6	0
	通級教室	35	30	22	4	9
指示理解	難聴学級	6	65	24	6	0
	通級教室	9	13	43	30	4

中学校重複あり		++	+	±	-	--
話し合いへの参加		17	0	42	0	0
提出物の状況		17	33	17	17	17
指示理解		17	17	67	0	0

1)「++」は問題がない状態～「--」は問題がある状態を意味する。

2)これらの4つの表の数値は各項目の割合を示しており、色のついたセルは最も割合が高かった項目を意味する。

学習への参加の状況や、指示に対する遂行能力については、基本的には年齢相応の能力を有するか、やや劣るかという傾向が読み取れた。特に「話し合いへの参加」ではやや劣るが多くなる様子うかがえた。小学校（重複あり）については、他と比較して学習参加や課題遂行上の困難さが増す様子もうかがえたが、提出物に関しては基本的に問題がなかった。中学校（重複あり）では目立った困難さは確認されなかった。

同年代よりも低い値を示した児童生徒について、自由記述を分析した。小学校（重複なし：有効回答 16）では件数の多い順に「友人とのコミュニケーションの難しさ（5件）」、「全体的な自信のなさ（4件）」、「全体的な積極性のなさ（3件）」、「言語面の弱さ（2件）」、「その他（2件）」であった。小学校（重複あり）では「宿題に関する問題（2件）」、「指示従事の弱さ」、「個に応じた

対応」,「家庭との連携」が1件であった。中学校(重複なし)では「自信の気持ちの表出の困難さ」,「集団場面での苦手さ」,「提出期限に対するルーズさ」,「話し合いの機会を設ける」,「諦めの早さ」が各1件であった。中学校(重複あり)では「個に応じた進め方」の1件であった。全体をみると,困難さの背景には,コミュニケーション面や言語面の苦手さに加え,自信や,積極性に関連する問題がある様子が見えてきた。

### ⑤学校での行動

「場にそぐわない行動の程度」,「落ち着きの無さ等の情緒的な課題」,「友人関係」について,属性別に回答を集計した結果を表8-16に示した。

表8-16 各属性における学校での行動の状態

小学校重複なし						小学校重複あり											
		++	+	±	-	--			++	+	±	-	--				
場にそぐわない行動	難聴学級	33	35	20	10	2	場にそぐわない行動	15	15	8	38	23					
	通級教室	23	37	31	8	2	ストレスの程度	8	23	15	46	8					
ストレスの程度	難聴学級	23	37	25	12	3	友人関係	0	38	54	8	0					
	通級教室	6	34	39	16	5											
友達関係	難聴学級	12	62	23	2	2	中学校重複なし										
	通級教室	13	39	32	16	0			++	+	±	-	--				
												中学校重複あり					
場にそぐわない行動	難聴学級	18	59	24	0	0	場にそぐわない行動	33	33	8	8	0					
	通級教室	48	22	17	13	0	ストレスの程度	0	33	50	17	0					
ストレスの程度	難聴学級	24	35	41	0	0	友人関係	0	33	67	0	0					
	通級教室	17	30	35	17	0											
友達関係	難聴学級	18	35	47	0	0											
	通級教室	13	52	22	13	0											

1)「++」は問題がない状態～「--」は問題がある状態を意味する。

2)これらの4つの表の数値は各項目の割合を示しており,色のついたセルは最も割合が高かった項目を意味する。

「そぐわない行動の程度」や「情緒的な課題」に関しては,重複障害の有無によってその傾向が異なり,特に小学校において,重複障害があればこれらの課題が増える様子が見取れた。

同年代よりも低い値を示した児童生徒について,自由記述を分析した。小学校(重複なし:有効回答17件)の自由記述をカテゴリに分類したところ,「場や相手に応じた行動の弱さ(5件)」,「友人関係の問題(4件)」と「感情のコントロールの弱さ(4件)」が上位を占めた。小学校(重複あり)では「場面の切り替え」と「多動性」が2件,「場や相手に応じた行動の弱さ」と「問題行動」が1件であった。中学校(重複なし)では「衝動的な行動」,「周囲への気疲れ」,「教員による受容的な対応」が各1件ずつ確認された。中学校(重複あり)では「感情のコントロール」が1件であった。以上より,重複障害なしの事例であっても,その背景には「場や相手に応じた行動の弱さ」や「感情のコントロール」などの発達障害に関連する苦手さが多くを占めており,その背景要因について詳細に検討する必要があると感じられた。他方で友人関係については重複障害のいかなを問わず,基本的に良好であった。

## II まとめ

教員に対する質問事項からは、特に小学校にて聴覚障害児に対する指導歴の浅い教員が多いことが明らかとなった。その傾向は、難聴学級や重複障害のある児童を担当する教員で顕著であり、0～1年程度の経験の者が多くを占めた。自由記述項目にて「補聴器装用時を指導した経験がないので人工内耳装用時と比較できない」や「特にない」といった回答も多くみられた点や、研修したい内容として「人工内耳に関する基本情報」が多く挙げられていた背景にも、これらの指導経験の浅さが影響していると思われる。指導経験が少ない教員は特別支援学校（聴覚障害）にも一定数いると思われるが、他の経験豊富な教員が存在する特別支援学校と、場合によっては担当教員一名のみで指導にあたる特別支援学級とでは事情が異なると考えられる。医療機関からの助言を積極的に求めている様子がかがえたことから、医療機関と連携や特別支援学校におけるセンター的機能の活用がますます必要になるであろう。その際は、児童生徒に対する支援はもちろん、指導歴の浅い教員への支援も求められる状況にあると考えられる。

人工内耳装用児童生徒の聴覚活用面については概ね良好であったが、傾聴姿勢が身につけていないといった問題や、語彙力が不足しており聴覚的な理解が弱いという問題も散見され、特に重複障害があるとそれらの傾向が高くなる様子がかがえた。一方で、「自分が聞き漏らしていることに気づいていない」や、「完全に聞こえていると誤解されている」といった問題もあり、これらは聴覚活用が良好であるからこそ生じる課題であると推察される。

言語面やコミュニケーション面については、同年代の健聴児童生徒と同程度と答える割合も高かった一方で、やや劣るという回答も一定程度確認された。また、小学校の難聴学級においては、言語面や学業成績が「劣る」という児童の割合が他に比べて高い点も特徴的であった。指導上の課題についても、語彙の問題や表現力の問題などが挙げられ、従来の聴覚障害児教育において課題とされてきた事項も確認された。重複障害がある場合は、聴覚障害由来の課題に加え、「場や相手に合わせられない」などの問題が加わり、それらの困難さが増す様子がかがえた。そのためか、重複障害のある児童生徒においてはコミュニケーション手段として手話や指文字などの視覚的なコミュニケーションも積極的に活用していた。

学校生活や学校での行動に関して、重複障害がない場合は概ね問題ないが、一部の児童生徒においてコミュニケーションが消極的になり、友人関係が乏しくなるといった問題を有する様子がかがえた。また、重複障害を有する児童生徒では、聴覚以外の障害に起因する問題も少なくないことが推察された。聴覚面や言語面の困難だけでなく、包括的な支援の必要性がかがえる。

全体を概観すると、聴覚面、言語面、行動面ともに同年代の健聴児童生徒と同じかやや劣る程度という回答が多かった。これらの結果を、特別支援学校（聴覚障害）に通う児童生徒と比較し、その特徴について検討を続ける必要がある。さらに、今回は必要に応じて指導形態に分けて分析を行ったが、言語面・学業成績において、小学校の難聴学級に「低い」傾向を示す児童の割合が高くなるという特徴がみられた。この結果は、指導形態の違いによるものなのか、所属する個々の児童の特性によるものなのかを検討する必要がある。今回は通常学級に在籍する群で一括して分析を行ったが、その中でも大きな個人差があると予想される。個々の事例にも着目しながら、

苦手さがある児童生徒の特徴を抽出していく作業が必要になると思われる。その際は、小学校から中学校までの発達の視点に基づいた分析も求められるであろう。